二〇一一年度懸賞論文審査報告

審査委員長　斎藤　峻彦

二〇一一年度における「関交研懸賞論文」は応募論文数が比較的少なく、また受賞作なしという結果になったことは残念であった。

応募された論文については、6名の審査委員による個別の審査のプロセスを経て、2011年12月12日に審査委員会が開催され、厳密な審議が行われた結果、「受賞作なし」とすることが決定された。

以下では、今回の応募論文に関する審査および評価のポイントを中心に、当懸賞論文の審査報告をさせていただく。応募された方々には今回の懸賞論文への応募に対し感謝を表するとともに、日頃から運輸交通・観光の研究に研鑽を積まれていることに心から敬意を表するしだいである。

本報告では、応募作品のうち「佳作」レベルであった2編の論文を対象に選評を加えることにしよう。

2編の論文　―A論文とB論文―　はいずれも真面目に取り組まれた誠実な内容の論文であり、いずれも読後に好印象を与える論文であった。とはいえ、好論文であったにもかかわらず、なぜ受賞作に至らなかったのかの理由を解説することにより、懸賞論文応募のさいの留意点としていただき、2012年度の懸賞論文への積極的なエントリーを呼びかけることにしよう。

A論文は、関西地方の或る中核都市における福祉車両を用いた介護保険施設の利用者送迎について、147個所の施設に対し郵送アンケート調査を実施し、送迎輸送の実状や送迎輸送の改善への取り組みを必要とする問題の所在を明らかにするとともに、問題解決策の方向性を探ろうとした研究である。

アンケートによれば、介護保険施設の約8割が利用者送迎輸送に対する不満を訴え、送迎車両のハード面、狭隘道路が多い道路インフラの状況、道路上で行う乗降時の危険の大きさなど、不満の中身がデータ分析を通じて明らかにされる。さらに、これら不満の発生に関わる政策的な課題を明らかにし、自家用車の運転が困難な高齢者や障害者の「生活の質」を高めるには、移動の確保だけでなく、移動のさいの安全や安心に関わる諸課題の改善をはかることにより、これら移動制約者の社会参加を促す事が重要であると結論づけた。

B論文は、近畿圏の観光振興を促すための各種交通改善策について考察した論文である。

論文では、まず観光拠点の1つである奈良市中心部を取り上げ、休日に発生する激しい自動車交通の渋滞現象を取り上げ、その原因となっている自動車交通政策や駐車場の容量不足に着目、平城遷都1300年記念行事のさいに導入した東大寺域における道路の一方通行策やパーク・アンド・ライド策の徹底、さらには歩道の整備などにより観光客の満足を高め、観光振興をは

かることが重要であると提案する。論文の後半では、議論の対象を近畿圏や公共交通に広げ、観光振興には域外からやってくる観光客の交通に対する不安を減じることが重要であるとし、情報の不安、着席に対する不安、駐車場に対する不安などを個別に取り上げ、それぞれについて、周辺の交通状況に連動させ視覚的にわかりやすい最適移動経路に関する情報提供、駅での列車案内などに関わる情報提供、空いた列車への誘導策など、観光客に対する具体的な交通改善手法を提案した。

いずれの論文も、本懸賞論文の募集理念に適合性を有し、また研究に対する問題意識や着眼点のよさ、観察力の鋭さ、客観的で簡潔な文章表現など、論文として備えるべき資質の点で高い評価を得ることができた。ところが反面、受賞作とはならなかった理由として、論文のもつインパクトの弱さとでも言ったらいいのだろうか、読後の好印象は残るものの、評者に満足感を与えるほどには著者の意が尽くされなかったという点を挙げることができる。評者の「満足」の源泉は、論文の新規性や独創性のような独自性、論理性・学術性のような学問水準の高さ、提案・提言力の強さ、感性のゆたかさなど、この種の研究論文の創作や執筆に関わるさまざまな要素にまたがっている。研究論文のインパクトの強さは、研究全体に流れるストーリー性の優秀さ、あるいは研究手法と研究結果の整合性や水準の高さといったように平均点の高さによって表現される場合もあれば、分析（または分析手法）の的確さや理論の導出（または検証）、提言の力強さやその内容の有用性、調査方法の緻密さやそこから得られるデータの有益性、あるいは研究テーマに寄せる情熱や愛着のつよさ、といった特定の評価要素に即して一点豪華主義のようなかたちで表現される場合もある。

前述の2作品はいくつかの評価要素について高い評価を受けたものの、肝心の研究テーマに深く関わるデータ分析や政策課題の精査、それにもとづく結論の導出に関して、今ひとつの説明努力や深掘りが必要であったのではないかというのが審査員の指摘であった。

A論文に関しては、アンケートの質問項目の工夫や得られたデータの分析手法の弱さが、アンケート調査から得られる分析結果を平凡なものにし、結論の説得力を弱める結果となった。B論文に関しては、観察力や表現力は優れているものの、自らの経験や直感に頼りすぎ、文献・資料類の調査が不十分であったため、客観性の高い論述や論理的な考察を欠く結果に終わっている。

ただ両論文に共通するのは、今回の選外は「佳作」レベルの評価と裏腹のものであり、応募者には再チャレンジを望みたいというのが大方の評者の意見であった。受賞作となるための第一の条件として、何はさておき、論文が力作であるとのインパクトを評者に与えなければならない。すなわち、応募者が受賞を志すには、まず自分の作品を「力作」レベルに引き上げる努力をすることが必要であり、それには、作品を磨き直すことをお勧めしたい。

完璧主義に陥り、公表に後ろ向きになることは避けねばならないが、論文全体を見直す過程で、論点整理の必要や論述における過不足が明らかとなり、何回かの補正加筆を施すことによって論文の完成度が大きく向上するといった状況は、論文を書く者であれば誰しもが経験することである。研究の意図やそこから得られた知見を他人に的確に伝えることは決して楽な作業ではないが、その点で苦労することもまた、研究の喜びを深め、研究の奥行きの深さを味わう心の拠り所となることを銘記すべきだろう。